第31回　くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート
ベートーヴェン生誕250年(2020)プロジェクト Vol.7

ピアニストたちのベートーヴェン

出演 田部 京子　菊地 裕介　浜野 与志男

ナビゲーター　西原　稔(桐朋学園大学音楽学部教授)

©Akira Muto

©井村 重人

©Shigeto Imura

2017年6月18日(日)　午後2時開演
一橋大学兼松講堂

兼松講堂より本館を望む

主催:ボランティアチーム如水コンサート企画
後援:(社)如水会・新三木会・国立市・国立市教育委員会・国立市社会福祉協議会・(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団・国立市商工会
国立市観光まちづくり協会・国立市商業協同組合・国立商工振興(株)・国際ソロプチミストくにたち
協力:一橋大学管弦楽団、「Café ここたの」(一橋大まちづくりサークル)

兼松講堂へようこそ

2005年から始まった「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」は、13年目、第31回目を迎えました。皆さまのご支援を心から感謝申し上げます。単なる名曲コンサートではなく、大学の講堂で行なうに相応しいテーマを掲げたコンサートを企図していますが、そのテーマの1つが、2020年の楽聖ベートーヴェンのメモリアル・イヤーを目指して2012年からスタートした《ベートーヴェン生誕250年(2020) プロジェクト・シリーズ》です。

ウィーン古典派とロマン派の〈結節点〉に立つ楽聖の生涯にわたる「音楽の変革」に着目した様々な“切り口”による個性あるプログラムを、一流の演奏家・演奏団体によりお届けして今回はその第7回目。

ピアノ・ソナタを中心とするシリーズとしては第3回目となる今回は、初期・中期・後期のソナタから4曲の傑作と、楽聖が少年時代から晩年まで好んで手掛けた数多くの≪変奏曲≫から代表的な2曲を演奏いたします。

1人のピアニストがベートーヴェンのピアノ・ソナタ数曲を演奏する音楽会はよくありますが、今回は、内外で活躍する3人の実力派ピアニストが弾き分けるという、ある意味で大変“贅沢な”コンサートです。

演奏時間は2回の休憩を挟んで3時間ほどになりますが、ごゆっくりお楽しみ頂ければ幸いでございます。

なお、桐朋学園大学の西原稔先生には、当初からこの《ベートーヴェンプロジェクト・シリーズ》の監修とナビゲーターをお引受けいただいており、改めて厚く御礼申し上げます。

ボランティアチーム 如水コンサート企画

LUDWIG VAN BEETHOVEN (1770～1827)

浜野 与志男

ピアノ・ソナタ 第11番 変ロ長調 Op.22 (1800)

I. Allegro con brio
II. Adagio con molto espressione
III. Menuetto
IV. Rondo. Allegretto – presto

ピアノ・ソナタ 第23番 ヘ短調 Op.57「熱情」(1804～05)

I. Allegro assai
II. Andante con moto
III. Allegro ma non troppo

休 憩(15分)

菊地 裕介

創作主題による6つの変奏曲 ヘ長調 Op.34 (1802)

《プロメテウスの創造物》の主題による15の変奏曲とフーガ 変ホ長調 Op.35 (1802)

休 憩(15分)

田部 京子

ピアノ・ソナタ 第30番 ホ長調 Op.109 (1820)

I. Vivace ma non troppo – Adagio espressivo – Tempo 1
II. Prestissimo
III. Gesangvoll, mit innigster Empfindung

ピアノ・ソナタ 第31番 変イ長調 Op.110 (1821～22)

I. Moderato cantabile molto espressivo
II. Allegro molto
III. Adagio ma non troppo – Fuga. Allegro ma non troppo

中庭に面した明るく落ち着いた
雰囲気の店内でイタリア料理を
お楽しみください

お電話でのご予約をおすすめします
リストランテ国立文流 TEL.042-571-5552
東京都国立市東 1-6-30 パティオマグノリア1F(JR 国立駅〈南口〉より徒歩3分)
◆営業時間：昼 11:30 ～ 14:30(L.O.) 夜 17:00 ～ 21:00(L.O.)
姉妹店 リストランテ高田馬場文流 TEL.03-3208-5447

田部 京子　Kyoko Tabe

©Akira Muto

東京藝大附属高校在学中、日本音楽コンクールに最年少で優勝。藝大に進学後、ベルリン藝術大学、同大学院を首席卒業。エビナール国際ピアノコンクール、シュナーベルコンクール各第1位、ミュンヘン国際音楽コンクール（ARD）第3位など受賞多数。バイエルン放送響、バンベルグ響、モスクワ・フィルとの共演ほか、世界のトップアーティストから共演者に指名され厚い信頼を寄せられている。

CDは30枚以上リリース、その多くが国内外で特選盤に選出。カルミナ四重奏団との共演盤『ます&シューマン：ピアノ五重奏曲』はレコード・アカデミー賞を受賞。これまでに『シューベルト・チクルス』、『シューマン・プラス』、『BBワークス<ベートーヴェン＆ブラームス>』のリサイタルシリーズ（浜離宮朝日ホール）が大成功を収めており、2016年11月には新リサイタルシリーズ『シューベルト・プラス』がスタートし、好評を得ている。桐朋学園大学教授。

オフィシャルHP：http://www.kyoko-tabe.com

菊地 裕介　Yusuke Kikuchi

©井村 重人

1977年東京生まれ。高校2年の'94年、日本音楽コンクール第2位。高卒と同時に渡仏し、パリ国立高等音楽院に入学。高等課程を経てピアノ研究科を修了し、5つの一等賞を得る。2003年からはハノーファー音大で研鑽を積み、'09年ドイツ国家演奏家資格を取得。皆川紀子、加藤伸佳、ジャック・ルヴィエ、アリエ・ヴァルディの各氏に師事。マリア・カナルス、ポルト、プーランクの各国際コンクールでの優勝のほか、数多くの国際コンクールに入賞。2007年に東京藝大の講師に招かれ帰国後、「毎日ゾリステン」、「東京オペラシティ B→C」など精力的な活動を展開。海外では仏・独・伊など欧州各国でリサイタルやオーケストラとの共演、国内では東響、都響、東フィル、新日本フィルなどと共演。

CDアルバムは「『B-A-C-H』(DENON)、『ベートーヴェン・ピアノ・ソナタ全32曲』(TRITON)ほか多数。東京音大専任講師、名古屋音大客員准教授。

オフィシャルHP：http://ykpianoforte.com/

浜野 与志男　Yoshio Hamano

©Shigeto Imura

1989年、東京生まれ。2011年、第80回日本音楽コンクールにて第1位、併せて野村賞、河合賞、井口賞、岩谷賞（聴衆賞）の受賞のほか、これまでに多くの国際コンクールに上位入賞及び優勝している。

東響、日本フィル、藝大フィルハーモニア、カザフスタン国立響、スウェーデン・ルンド響等と、指揮者ではアレクサンドル・ラザレフ、ダヴィド・ゲリンガス、円光寺雅彦、大友直人、山田和樹等と共演。室内楽ではロシア国立チャイコフスキー四重奏団、ウィーン・ラズモフスキー四重奏団等と共演している。東京、ロンドン、モスクワなどでリサイタルを開催。'17年2月「東京オペラシティ B→C」に出演。

東京藝大附属高校、同大音楽学部を経て、英国王立音楽大学大学院修士号およびアーティスト・ディプロマを取得。これまでに岡田敦子、E.アシュケナージ、御木本澄子、D.アレクセーエフ、G.ファウト、N.フィテンコほか各氏に師事。現在はモスクワ音楽院にてエリソ・ヴィルサラーゼのもとで研鑽を積んでいる。

オフィシャルHP：https://www.yoshiohamano.com/

西原　稔（ナビゲーター）　Minoru Nishihara

山形県生まれ。東京藝術大学大学院博士課程満期修了。桐朋学園大学音楽学部教授。

18、19世紀を主対象に音楽社会史や音楽思想史を専攻。著書に『音楽家の社会史』、『聖なるイメージの音楽』、『音楽史ほんとうの話』、『ブラームス』、『シューマン全ピアノ作品の研究』（以上、音楽之友社）、『クラシック 名曲を生んだ恋物語』（講談社）、『「楽聖」ベートーヴェンの誕生』（平凡社）、『クラシックでわかる世界史』、『ピアノ大陸ヨーロッパ』（以上、アルテスパブリッシング）、『世界史でたどる名作オペラ』（東京堂出版）、『ピアノの誕生・増補版』（青弓社）などの著書のほかに、共著・共編で『ベートーヴェン事典』（東京書籍）、訳書に『魔笛とウィーン』（平凡社）、監訳・共訳で『ルル』、『金色のソナタ』（以上、音楽之友社）、『オペラ事典』、『ベートーヴェン事典』（以上、平凡社）などがある。

ベートーヴェンのピアノ・ソナタと変奏曲

ベートーヴェン(1770 ～ 1827)は、ピアノ・ソナタとピアノのための変奏曲をほぼ生涯にわたって書き続けている。故郷ボンでの少年時代に最初に書いた作品は、「ドレスラーの行進曲による９つの変奏曲WoO.63」(1782年／12歳)と「3つの選帝侯ソナタWoO.47」(1782 ～ 83年)であった。

以後、作品番号を持たないものも含めて全37曲のピアノ・ソナタを手掛け、最後の「第32番Op.111」は1822年に書き上げられ、一方、変奏曲は22曲残しているが、晩年の大作「ディアベリのワルツによる33の変奏曲(Op.120)」は1823年に完成させている。

■ ピアノ・ソナタ　第11番　変ロ長調　Op.22（1800年）

6曲からなる弦楽四重奏曲Op.18、七重奏曲Op.20、交響曲第１番Op.21など、楽聖のいわば「初期」に属する名作群と同時期に作曲。ハイドン、モーツァルトを継承したベートーヴェンの、古典派のピアノ・ソナタの“頂点”に立つ自信作で、自ら《グランド・ソナタ》と名付けている。

第１楽章は躍動的な主題に始まる若さに溢れ、第２楽章はロマン派のノクターンの風情を湛えた美しい緩徐楽章。第３楽章は短調の中間部が置かれた優美なメヌエット。第４楽章は優美さと輝かしさに満ちたロンド・フィナーレ。

■ ピアノ・ソナタ　第23番　ヘ短調　Op.57「熱情」（1804～05年）

《熱情Appassionata》のタイトルは出版社が付けたものであるが、正に的確に内容を表現している。いわゆる“ハイリゲンシュタットの遺書”(1802年)の苦悩を克服し、「中期」の傑作群すなわちピアノ・ソナタ《ワルトシュタイン》、ヴァイオリン・ソナタ《クロイツェル》、交響曲第３番《エロイカ》に次いでこの《熱情》が作曲されたが、この直後の交響曲第５番やピアノ協奏曲第４番に共通する「運命の動機」が支配する激しく闘争的な気分に溢れている。第２楽章は主題と４つの変奏からなり、束の間の安らぎを湛えているが、アタッカでそのまま嵐のような第３楽章に突入する。

大きな感情的起伏、古典的な様式観、革新的なピアノ書法が一体となったピアノ・ソナタの屈指の名作といえよう。

■ 創作主題による６つの変奏曲　ヘ長調　Op.34（1802年）

変奏曲はベートーヴェンが少年時代から好んだ形式で、上記の通りボン時代の最初の作品が変奏曲であった。当時のウィーンの貴族たちの間では、ピアニストたちに即興的に演奏させて楽しむ習慣があったが、即興演奏は一般的には変奏曲の形式が多かった。若きピアニスト・ベートーヴェンは変奏曲の達人として時代の寵児でもあった。

彼が残した22曲の変奏曲中、作品番号が付されたものは僅か４曲にすぎないが、その最初の２曲がOp.34とOp.35の姉妹作で、彼の出版社宛の書簡によれば“芸術作品”としての自信を持っていたことが窺われる。しかも、晩年の大作「ディアベリ変奏曲」以外の３曲はすべて自作の主題による変奏曲である。

■《プロメテウスの創造物》の主題による15の変奏曲とフーガ　変ホ長調　Op.35（1802年）

この曲は通称《エロイカ変奏曲》と呼ばれている。本作の翌年に書いた「交響曲第３番《エロイカ》」の終楽章の変奏曲にこの主題が用いられて有名になったためだが、作曲の順番からいえば、バレー音楽「プロメテウスの創造物」Op.43 (1801年) のフィナーレに先に用いられていることから、正確には《プロメテウス変奏曲》と称されてもよい。

Op.34と異なり、主題の前に、伴奏としてのバスの声部がまず序奏として前面に押し出され、計４回繰り返された後に変奏曲の主題が現れる。15の華麗な変奏の後、フィナーレは圧倒的な３声のフーガ。フーガ主題は序奏主題からなっており、変奏曲主題と絡み合った二つの主題による２種の変奏で壮大なクライマックスを迎える。

■ ピアノ・ソナタ　第30番　ホ長調　Op.109（1820年）

大作の第29番《ハンマークラヴィーア》ソナタを完成して２年後の1820年、ベートーヴェンは出版社に３曲のピアノ・ソナタの構想(Op.109 ～ Op.111)を書き送っている。この３曲は、ピアノ・ソナタ形式の伝統的な書法から脱し、晩年の楽聖が到達した「後期様式」の自由な筆致による革新的な音楽となっている。

1820年秋、本作が完成。第29番が革新的な書法による巨大な作品であるのに対し、叙情的で親密さを湛えている。流れるような主題に始まるファンタジーに満ちた第１楽章はプレリュード風の趣き。切れ目なく続く第２楽章は歯切れのよいリズムで進むスケルツォ風。第３楽章は〈歌うように、内面の感情をこめて〉と題された、《熱情》ソナタの緩徐楽章以来の変奏曲の楽章。末尾では天上の歌ともいうべき法悦的な世界が現れる。

■ ピアノ・ソナタ　第31番　変イ長調　Op.110（1821～22年）

1821年完成した本作は、叙情性と思索性の両面で更なる深化が窺われる。

第１楽章は、ベートーヴェンには珍しく〈愛らしく〉と指示された叙情性を湛えたのびやかな旋律が心に沁みる。

第２楽章は、一転、スケルツォ風となり、コーダが次の楽章への橋渡しとなる。

第３楽章は形式、内容ともに極めて独創的な音楽。まず、アダージョから始まって、テンポと調性が目まぐるしく変化するレチタティーヴォの後、「嘆きの歌」と記された息の長い旋律が続き、やがてアレグロ・マ・ノン・トロッポで堂々たるフーガが開始される。

晩年のベートーヴェンのソナタは、救済がもたらす宗教的ともいえるエクスタシーの響きで閉じられると言ってよい。

Interview

“ピアニストたちのベートーヴェン”に寄せて

取材・文　高坂はる香（音楽ライター）

■浜野与志男さん（ピアノ・ソナタ第11番Op.22、第23番Op.57《熱情》）

—浜野さんはこれまで、ベートーヴェンにはどのように向き合っていらしたのでしょうか？

最初に“汗と涙を流した”ベートーヴェンのソナタは、東京芸術大学付属高校の入試の時に弾いたソナタ17番「テンペスト」。ペダリングや弾き方について細かな指導を受ける中、なんて大変な曲なのだと思った記憶があります。今は指の使い方やペダルの踏み方が分かるようになり、細かいところに神経を使えるようになりました。自主的に取り組んでいきたいという思いが強くなったのは、昨年くらいからです。ちょうど良いタイミングでこの企画にお誘いいただいて嬉しいです。

—その変化には、きっかけとなる出来事があったのでしょうか。

東京芸大を出たあと、3年ロンドンに留学してロシア人のドミトリ・アレクセーエフ先生に師事し、その後1年ほどライプツィヒで生粋のドイツ人であるゲラルド・ファウト先生のもと学びました。この時にドイツ人の音楽や生き方を間近で見ることで、自分の中で確かに変化がありました。耳の使い方が変わり、細かいところまで神経が行き届くようになったという感じでしょうか。

ドイツの演奏家は、一人でピアノを弾くときでも、アンサンブルのように複数の奏者が互いの音域を聴き、溶けあうことを目指すときのような耳の使い方をしていると感じたのです。これによって、ベートーヴェンはもちろん、バッハについても演奏する上での意識が変わりました。

—今回演奏されるピアノ・ソナタ11番と23番《熱情》について、作品のどのようなところに魅力を感じますか？

ハーモニーの動きに実験的なものが垣間見られるところが魅力だと思います。そういったベートーヴェンの挑戦する姿勢が伝わるような演奏がしたいです。

あと、僕はとくにピアノ協奏曲などで2楽章が一番好きだと感じることが多いのですが、《熱情》についてもそうです。よくロシア人のピアニストで、“アンチ・クライマックス”、つまり逆説的なクライマックスという言葉を使う人がいるのですが、この楽章はまさにそのような感じ。音量的にも盛り上がりの面でも底辺にあるにもかかわらず、とても大きな意味がある楽章です。

—ベートーヴェンという作曲家に対しては、どのような想いがありますか？

僕は小さい頃から、好きな作曲家を聞かれると、誰かを挙げると他がかわいそうだから選べないと答えていたので、今もベートーヴェンだけが偉大だという言い方は避けたいのですが、それでもやはり、ベートーヴェンのピアノ作品は、ピアノ音楽というものにおける一つの頂点を築いたものだと思います。演奏テクニックを生かした最高の作品という意味ではリストも挙げられますが、ベートーヴェンは、ピアノによる音楽表現という意味で最高峰の作曲家だと言えると思います。

—ベートーヴェンの作品を練り上げていくにあたって、一番大切にしていることはなんですか？

ベートーヴェンの作品を弾いていると、音の響きや音色、ハーモニーに注意がいってしまって、ここもあそこも聴かせたいという欲求がつい強く出てしまいます。ですが同時に、全体の大きな絵、完璧な構造美がそこにあることを見失ってはいけないので、その両方を考えながら修正していく作業を繰り返していきます。

—国立や兼松講堂に想い出はありますか？

兼松講堂で演奏するのは今回が初めてですが、以前聴きに行ったことはあります。私は八王子市出身で、そして国立は桐朋中学校に通っていたので親しみのある町です。朝、遅刻しそうになりながらあの並木道を急いだ思い出が大きいですね。

—最後に、このベートーヴェンシリーズに登場されるうえでの意気込みをお聞かせください。

二人の大先輩と同じ舞台に立つことができて光栄です。そこで“年齢相応”の浅い演奏をすることがないよう、妥協のない音楽づくりを目指し、自信の持てる演奏で臨みたいと思います。

■菊地裕介さん（創作主題による6つの変奏曲Op.34、《エロイカ変奏曲》Op.35）

—今回はベートーヴェンの作品から二つの「変奏曲」を演奏されます。作品の魅力についてお聞かせください。

「創作主題による6つの変奏曲」Op.34と、「創作主題による15の変奏曲とフーガ」Op.35、通称《エロイカ変奏曲》は兄弟のような作品で、その内容は対照的です。Op.34は、メロディアスで魅力的なテーマを持ち、調性を3度ずつ下げていく、とても野心的な作品。調性が変わっていくという意味で、ファンタジーに近いところがあります。フレンドリーなベートーヴェンを感じます。

一方、Op.35のテーマは、最初にバレー音楽「プロメテウスの創造物」で使われたもので、その後、この変奏曲、そして最終的には交響曲第3番《エロイカ》で使用されました。3つの作品で使うようなものだけに、テーマの要素はミニマムです。主題と同じ調性で最後まで突き進んでいくという、ベートーヴェンの変奏曲らしい魅力にあふれています。

—菊地さんはすでにピアノソナタ全曲や、《ディアベリ変奏曲》・《エロイカ変奏曲》を録音されていますが、ベートーヴェンに集中して取り組むようになったきっかけは何でしょうか？

全ての作品が格好いいし、おもしろい。だから全部やってみたい、というごく自然な感覚で取り組みました。それによって生涯をたどり、スタイルの変遷が改めて感じられましたが、終えてみて何か新しい発見があったというよりは、やはりこういう人だったなと思ったというほうが感覚に近いです。

—ソナタ全曲というと大プロジェクトのように感じますが、ごく自然な音楽の営みの中で実行されたのですね。

力んで臨んだという感覚はありません。僕にとってベートーヴェンの音楽はとても自然で、楽譜さえあれば弾ける、むしろ息抜きに

～生菓子も焼菓子も‘くにたち’がいっぱい詰まっています～

‘くにたち’らしい‘くにたち’だけのお菓子がここにはあります

HAKUJUJI KUNITACHI

洋菓子

国立 白十字

南口店　国立市中1-9-43　042(572)0416

富士見台店　国立市富士見台1-37-28　042(572)1718

なるような音楽です。もちろん学生時代に勉強していた頃は大変な作品だと思っていましたが、今は最も力まずに演奏できます。それこそがベートーヴェンのすばらしさです。

誤解を恐れずに言えば、モーツァルトやハイドンも含め、古典派の音楽というのは、音楽がわかってさえいればー番やさしいもの、自由に泳ぐことができるものだと僕は思うのです。機能和声があって、枠組みやフレージングも自然、拍子もきちっとしています。人間にアクセスしやすい形の音楽だと思います。だからこそ、今まで培った音楽をそのまま出すことができるのです。

―ベートーヴェンの魅力は、どのようなところに感じますか？

音楽の要素として、きれいなもの、衝突するようなもの、すべてが入っています。そして音楽におけるバランスやタイミングが絶妙です。変奏曲のすばらしさに表れるように、ベートーヴェンは作品を“こねくり回す”ことが好きな人でした。その結果としてすべてが絶妙なものになっている。彼にしかわからない最終調整が入ることで、全てがバタバタとドミノをかえすように変わり、曲の価値もあがるのです。これは天才的な感覚で、技術だけによるものではありません。

そして僕がベートーヴェンの最も好きなところは、その正直さ。なにがあっても自分を貫いたのはすごいことですし、逆にそういう形でしか生きられなかったのだろうとも思います。それゆえに誤解されやすい部分もあったでしょうね。そんなところに、自分のパーソナリティと共通する部分が多いと感じることもあります。

僕自身は社会に揉まれて、彼ほどのまっすぐさは失いつつありますが……。

―兼松講堂ではこれまでにも何度か演奏されていますが、印象はいかがですか？

良い意味で日本らしくない空間で、例えばフランスのサル・ガヴォーのような、音楽とともにある良い時代の雰囲気を残していますね。スクラップ&ビルドのほうが安上がりとされる今のご時世に、卒業生の皆さんをはじめ、多くの方々の想いに支えられた大改修によってこうして成り立っているのだろうと思います。大事にされていることが伝わってくる、印象深い場所です。

■田部京子さん（ピアノ・ソナタ第30番Op.109、第31番Op.110）

―今回はベートーヴェンのソナタから、第30番と第31番を演奏されます。晩年のソナタを弾くことのおもしろさはどんなところに感じられますか？

晩年の作品には、作曲家の人生への回想や、どこか希望のようなものまでもが凝縮して投影されるように感じます。とくにベートーヴェンは音楽で人間を表した最初の作曲家で、そんな彼の晩年の作品には、まさに人生の軌跡であらゆる要素が詰まっていると感じます。難聴という困難に直面し、挫折や絶望を感じながらもそこから這い上がり、常に革新を求めて生きていく。聴こえないことが日常となる中で、晩年まで自己の音楽世界を熟成させました。膨らんだイメージを音にできるピアノの発展を求め、可能性を追い求めていったのです。ただ、それを彼は自分の耳で実際の音として聴くことはできなかった。聴こえない世界の中で創造された音楽の奥深さとエネルギーを感じながら、本質に少しずつ近づくことを目指すのが、ベートーヴェン晩年の作品を弾くおもしろさだと思います。

―田部さんは2年前に後期三大ソナタを録音されていますが、録音を決めたきっかけはあるのでしょうか。

昔からどの作曲家についても、人生が凝縮されたような晩年の作品が好きでした。20代のデビュー間もない頃にシューベルトの最後のソナタを、また2011年にブラームスの晩年作品集も録音しています。

ベートーヴェンの最後の3つのソナタには高いハードルを感じていましたが、シューベルトやブラームスの晩年の作品を録音したことで、その源ともいうべき、古典派とロマン派の重要な架け橋となったベートーヴェン晩年のソナタには、やはり取り組むべきだと感じたのです。それを長らく目標にしてきて、今、やるべきときがきたのだと感じて録音しました。

ベートーヴェンの作品には、確固たる構築というものがあります。シューベルトがベートーヴェンに憧れたのも、そんなところだったはずです。巨大な建築物のようなものの中で、古典的な要素、楽器の発展を反映した表現の幅、ロマン派的な感情、そしてベートーヴェンの語法があり、演奏する際にはそれをすべて感じ、表現しなくてはなりません。そこにやりがいがあります。

―お若い頃から晩年の作品がお好きだったのですね。

なぜでしょうね。晩年の作品だからといって、いわゆる「枯れている」わけではないところが興味深いのです。

諦観の要素を感じたりもしますが、どちらかというと若い頃の情熱やエネルギーも音楽の中に含まれ、積み重ねてきたものがすべてそこにあるのが晩年の作品だと私は思います。生と死や、自分がなぜ存在しているのかという普遍的な問いについて考えさせられる部分が強いですね。そういった人間の本質、作曲家の人生、培ってきた作曲の技法、そのすべてが集約されているところに、若い頃から惹かれていたのだと思います。

―では、ベートーヴェンは田部さんにとってどんな存在ですか？

あらゆるピアノ作品と接する中で「源」のような存在です。特にドイツ・ロマン派の作品を演奏するうえでの原点だと思います。作曲家の感情の音楽表現という点について、例えば自然について考えたとき、音楽で風景を感じさせる描写があると思いますが、実際にその自然を愛し、感じているのは人間なのだということを実感するのがベートーヴェンの音楽です。

―ところで、国立の兼松講堂へは初めてのご登場ですね。

今までお写真でしか拝見したことがありませんが、とても雰囲気のある建物ですね。国立は、電車で通ったことはあってもなかなか降りる機会がありませんでしたが、並木道があって緑が多く、静かですてきな学園都市というイメージがあります。今回は、国立に行けるということだけでも少しワクワクしていますが、由緒ある兼松講堂で演奏させて頂くことをとても楽しみにしています。

＊聞き手の音楽ライター・**高坂はる香**さんは、一橋大学大学院社会学研究科修士課程修了。㈱ショパンに勤務、「月刊ショパン」編集長を務めた後、現在、クラシック音楽のフリーライターとして内外の著名音楽コンクールの取材で活躍するかたわら、大学院時代のテーマでもあったインド関係のプロジェクトにも取り組んでいる。ご自身のブログ『ピアノの惑星JOURNAL』(http://www.piano-planet.com/) は大好評。

せきやビル地下の売り場が大きく変わりました

SAKE-BOUTIQUE
SEKIYA
Depuis 1910

国立せきやビル1F・B1F
☎042-576-3111（代表）
☎042-571-0001（店・直通）
営業時間／11：00〜22：00